

コンラト・フェルディナント・マイヤ-における母親像

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 久男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8111

コンラート・フェルディナント・マイヤー における母親像

田村久男

「私の母親ベッティ・ウルリヒは、彼女をよく知るすべての人々の意見によると非常に親切で、独特でメランコリー気味のところもなくはない繊細な女性であり、彼女自身が性格づけているところでは〈快活な精神と悲しい心〉を持った女性であった。ブルンチュリは『我が人生の思い出』という本の中で私の父親と、とりわけ母親の姿を見事に描写している。私はこれに言葉をはさむつもりはないし何もつけ加えることはない」

これは1885年、マイヤー60歳の年に求められて書いた、自伝風なスケッチの中の母親についての記述である。

十九世紀スイスの詩人、歴史小説家コンラート・フェルディナント・マイヤー（1825-1898）が作家としてデビューするのは、作者39歳の時に匿名で出版した詩集『あるスイス人の二十のバラード』（Zwanzig Balladen von einem Schweizer, 1864）であるが、1871年の長編物語詩『フッテン最期の日々』（Huttens letzte Tage）で、その内容がドイツ統一と第二帝国成立の時流にかなったこともあってようやくドイツにおいてもその名が知られるようになる。この年以降『護符』（Das Amulett）、『ユルク・イエナッチュ』（Jürg Jenatsch）を初めとする歴史小説を中心とする分野で堰を切ったように創作に励み、1891年『アンジェラ・ボルジア』（Angela Borgia）を最後に精神を病んで執筆ができなくなるまでほぼ毎年のように作品を発表し続ける。

マイヤーの生涯においては、彼が作家として身を立てることを決意するま

でと、それ以降の半生を比べると、そこにはまるで別人と思えるほどの際だった違いが見られる。チューリヒの門閥貴族の家に生まれたマイヤーは15歳で父親を失い、その後は妹ベッツィとともに信仰心の篤い母親の手で育てられる。早くから文学に興味を持ち詩人になろうと決意するが、母親の強い反対にあい、これに激しい反発を感じ、ひとり自分の部屋に隠ったまま詩作と乱読に耽り、世間からも家族からも隔絶した「隠者」のような生活を送る。昼間は人目を避け、突然、夜中にチューリヒ湖に船をこぎだして泳ぎ、家族を心配させ、チューリヒの町の人たちからも奇人扱いにされる。自分でも将来の目標が見つからないまま絶望のあまり自殺をさえ考えるようになり、ついには1852年、作家27歳の年に精神的な不安定が高じて一時的にヌシャテル州の精神病院に入院する。この迷いの時期の決定的な原因となっていたのが母親エリーザベトの反対、息子の詩作活動への無理解で、これがマイヤーの作家としての成長を妨げる結果となったのは否めない。そして、彼がこの迷いから決定的に解放され、作家として世に立つことを決意するのは皮肉なことに1856年の母親の不幸な死がきっかけとなるのである。冒頭に挙げた、マイヤーが自分の母親について述べている文章も、自らの回想でありながら、ほとんどが他人の言説の間接的な引用でしめられたきわめて奇妙な記述であり、ここにも母親の死後三十年近くも経ってさえなおもマイヤーの心に残る母親へのわだかまりが感じられる。

マイヤーの母親エリーザベト・マイヤー＝ウルリヒは1802年にチューリヒに生まれた²。父親ヨーハン・コンラートは、ラーヴァーターの個人的な庇護をうけて聾啞教師として出発し、フランス革命の思想に感銘をうけた熱烈な共和主義者で、娘の生まれた時期にはヘルヴェティア共和国のチューリヒの州知事を務めていた³。15歳の時、四歳年上の兄ハインリヒを失う。1821年から翌年にかけて、かつて父親が聾啞教師として働いていたフランス語圏のローザンヌに滞在し、そこで亡き兄の友人であったフェルディナン

ト・マイヤーと知り合い、1924年二人はチューリヒで結婚し、翌年息子コンラートが生まれる。1828年には最愛の父親を失い、母親とともに、両親が養子として育てていたアントニン・マレを引き取る。1831年、娘エリーザベト（ベッツィ）誕生。1840年には夫フェルディナントを失い、その後、家庭内で息子コンラートの無言の反抗に苦しむ。1856年、いっしょに暮らしていたアントニン・マレの病死がきっかけとなり、憂鬱症状に陥り自殺する。

冒頭に挙げた自伝風の略伝の中でマイヤーも触れているが、父親フェルディナントの学生時代の友達で、しばしばマイヤーの両親の家を訪れていた法律家ヨーハン・カスパール・ブルンチュリ（1808-81）はエリーザベトについて次のように述べている。

「彼女は、女性的なるもの理想が生身の姿をとっているかのように私には思われた。男たちと張り合うほどの才知にあふれた女などというものは私には不快でしかなかった。しかし、彼女の姿に最も高貴なる精神的特質、機敏で明確な理解力、深い洞察力、繊細で控えめな感性と、愛すべき優美さ、穏やかさそして優しさが混じり合うのを見たのである。彼女は貞淑でかいがいしい奥方であり良き母親、貧しい者たちにとっては献身的な友人、慎ましやかな主婦、客に対しては優しく楽しい女主人であった。彼女といっしょにいると私自身高められ、いつも以上に無垢な気持ちになった。彼女は深い信仰心をもっていたが、狭量でも陰気でもなかった。信仰は彼女のよりどころであった。利発で物事にのめり込みやすい精神ゆえ、また、ともしれば節度のない極端まで引きずられがちであったがために、なおさら彼女は信仰を必要としたのである。彼女の中には何か普通とは違うもの、それゆえに予測のつかないものが存在した。このことのために、彼女の夫も非常に教養がある人物だったが、それでもなお彼女の方が精神的にも夫を凌駕していた。夫の能力は彼女よりも杓子定規に過ぎ、夫が躊躇することも彼女は大胆にやっつけただのである」⁴

母親エリーザベトについては、これまで息子の創作への頑なな反対を理由に、敬虔なプロテスタントではあるが、ともすれば文学には理解のない散文的な人物であると誤解されがちであり、マイヤーの伝記などでもしばしばそのような人物像で描かれることが多い。しかし、このブルンチュリの文章からは、逆に非常に知性的で、魅力あふれる人物が浮かんでくる。そして、これが単に旧友の亡き妻に対する儀礼的な社交辞令でないことは、昨年(1998年) C. F. マイヤーの没後100年を機に公刊された子供たちに宛てた彼女の書簡集からも感じとれる⁵。この書簡集はこれまでの詩人の母に対するステレオタイプな偏見を打ち破るもので、そこには敬虔であると同時に、一人の教養豊かな女性、そして子供たちのために生きる母親の姿を見て取ることができる。彼女は、親友マティルデ・エッシャーの感化を受けて貧民のために慈善活動を行うとともに、家庭の中では驚くべき読書家で、文学に対する知識と素養は、折りに触れ子供たちに助言を与えるほど豊かなものであった。また、当時暮らしていたチューリヒのシュターデルホーフエン街の家では、小規模なものではあったが文芸サロンとも呼ぶべき集まりを主催し、この「月曜日の集まり」(Montagsgesellschaft)には、画家のデシュヴァンデン、アンネ・フリース、コンラート・ツェラー、あるいは後に『ハイジ』の作者として有名になる若きヨハンナ・シュペーリ、ヴィクトール・フォン・シェッフェルらが常連として参加し、折に触れて詩の交換や朗読会なども開かれていた。当時チューリヒに滞在していたリヒャルト・ワーグナーも一度この集まりに顔を見せている。

彼女自身が文学に対して深い興味と知識を持っていたにも関わらず、なぜ息子の詩作に反対したのか、その理由ははっきりしないが⁶、母親への反発とともに、それまでジャン・パウルをはじめとするロマン主義的な文学を模範としていたマイヤーは、美学者フリードリヒ・テオドール・フィッシャーのロマン主義批判に接することで作家としての理想の方向を失い、精神的不安定が高じ、自殺をさえ考えるようになる。(いわゆるマイヤーの「フィッ

シャー危機))。そして、ついには1852年6月、「母親のために」ヌシャテル州のプレファルジュの精神病院への入院に同意する。彼は最初の診断で正常という判定を受け、翌年ローザンヌに移り、亡き父親の友人の歴史家ルイ・ヴェリエマンのところでフランスの歴史家オーギュスタン・ティエリの著書の翻訳に取り組む。この時期、自分の本を一度取りに戻りたいという息子の希望に対して、母親は娘のベツィに宛てて次のようにいっている。「それからもうひとつ、コンラートの手紙についてですが、その最後のところで、本を梱包するために一度チューリヒに帰りたいと言っています。もしおまえがコンラートに思いとどまるように言ってくれるなら、私にとってこれほどうれしいことはありません。なぜなら、そうなれば、不必要なお金を使う必要がなくなるからということもありますが、何よりわたしが息子と再会しなくてもすむからです。おまえも知っているように私は自分の息子が怖いのです。だから、おまえもきっと私の頼みを聞いてくれますね。どうか、お願いです」(1853年7月30日付)⁸

1856年、母親と息子の立場は逆転する。彼女の父親がローザンヌで聾啞教師をしていた頃に軽度の精神的、肉体的障害があったため自分の養子にし、それ以来、エリーザベトにとっては生まれたときから兄妹同然だったアントニン・マレが半年間の激しい苦痛に耐えた末、7月末に病死する。彼女はその死に対する自責の念から激しい憂鬱症状に陥り、子供たちによって8月、病院をかねていた南ドイツ、ラーベンスブルクの近くにあるヴィルヘルムスドルフの敬虔主義教団に送られる。その教団から彼女は子供たちに宛てて母親としてのそれまでの自分の誤りを手紙で書き送っている。「あの善良なコンラートのためにも、もう一度ちゃんとした母親になりたいと思っています。息子に不満ばかり言い始めたあの悲しい時期から、私はそのような母親でなくなっていたのです。私が道から外れてしまったことを神がお許しになりますように」(1856年8月4日付)、「我が子よ、もし主がこの危機を乗り切るのをお助けくださるなら、主の手助けで私はすっかり新しい人生を

始めるつもりです——もう不平を口にしたりせず、私の魂を清めるために必要なことにはなんでも喜んで従うつもりです。(中略) おまえベッツィ、そして愛するコンラートのためにもう一度ちゃんとした母親になれると思います。たとえもう明るくふるまうことはできなくとも、誠実で、本物の母親に。単に見せかけだけではない愛情をもち、決しておまえたちの生き方を邪魔するようなことはしないつもりです」(8月7日付)、「コンラートは、私に一度も励ましの言葉をもらったことがなく、やさしく受け入れてもくれなかったといいましたが、たぶんその通りでしょう。これは私の信仰の乏しさゆえの全くの誤りでした——息子が自分で魂の安らぎと安心の真実の基盤を見つけ、保ち続けることができますように」(8月11日付)。彼女はこれらの手紙を書いた一月あまり後に自ら命を絶つことになるが、これらの言葉からは、単に彼女がアントニン・マレの病死に対する自責の念ばかりではなく、自分の母親としての息子に対するこれまでの態度を、深く悔やんでいたことがうかがえる。

いったんはこのヴィルヘルムスドルフの教団で、彼女は再び将来への希望を持つことができたかに見えたが、結局は罪の意識に打ちひしがれ、四年前に自らコンラートを連れていったヌシャテル州のプレファルジェの精神病院に移される。そしてそこで、1856年9月27日、娘ベッツィが病院に自分を訪ねてくるという知らせを受けた彼女は、病院の許可を得て娘が到着することになっている船着き場まで迎えに出て、そのまま湖に身を投ずるのである。彼女は、子供たちに宛てて次のような遺書を残している。

私が心から愛するいとしいベッツィへ、そして、コンラート、お前にも。

例えようもない心の痛みを感じて私はお前たちのもとを去ります。おそらくは二度と会うこともないでしょう——でも、私がこれ以上の罪を重ねてお前たちをますます不幸せにしないために、これはどうしても必要なことなのです。(中略)

私は自分自身がおぞましい——ああ、慈悲深き主よ、今これから私が落ちてゆこうとしているあの暗い場所でも、どうか私を哀れみてください。(中略)

もう一度いいます、心から愛する子供たちよ——私はおまえたちにとってます

ます恐ろしい重荷となるでしょう。悲しいことですがこれよりほかに道はないのです。おまえたちの哀れな母親のために祈ってください。しっかりと二人手をつないでキリストの十字架のもとに跪くのです。たとえ私のためにおまえたちに恐ろしい運命が降りかかろうとも、そこにこそおまえたちの救いはあるのです。

ああ、どんなにか私も神の慈悲を受け入れられることを望んだことでしょうか。たとえ一滴でも贖罪の血を渴望し、それを得ようとどんなに努力したことでしょう——もう一度私が生きていることができるようにと。無駄でした。

私を捕らえて離さない暗い力が底へ底へと引きずり込みます。キリスト様、地獄に堕ちようともどうか私をお救いください——キリスト様、いつもあなたのことを考えています。そして今、あなたに倣い私も死を願うのです——⁹

マイヤーの作品における母親像

上に触れたように、母親についてのマイヤー自身の言及は、個人的な手紙のたぐいを含めてもその数はきわめて少なく、またその内容も、まるであまり深く立ち入りたくないかのように簡単である。母親の死後、彼女の死が自然なものでなく、当時産業化が始まっていたとはいえまだ多分に地方都市の性格を残していたチューリヒの市民の噂を恐れたからとも考えられるが、妹のベッツィとともに、あたかも母親のことはタブーであるかのように口を閉ざすのである。

そこで、マイヤーの作品を手がかりに、マイヤーが母親に対してどういうイメージを持っていたのかを探っていきたい。しかしながら、これも特徴的なことであるが、マイヤーの文学、特に散文作品においても母親の存在はきわめて希薄である。最初の歴史小説『護符』を初めとして大多数の作品の主人公は早くにして母親を失っているか、あるいはほとんど触れられない。きわめて自伝的な要素が強いとされる『ある少年の悩み』(Das Leiden eines Knaben)の主人公ユリアン・ブッフラーでさえも、すでにはやくに母親と死別しているのである。

1885年の『女裁判官』(Die Richterin) でむろん歴史小説、つまり史実の仮面を付けてはいるものの、ようやく母親を物語の中心に据えた物語を描く。この作品で、少なくとも母親が触れてはならないタブーではなくなり、正面切って作品の主人公として扱われるのである。そして、ここにいたるまで、作者自身の内面で、若い頃の反発と不自然な死の記憶という二重のトラウマを乗り越えるために30年の年月が必要だったといえるのかもしれない。

この散文作品での母親像の欠如を補い、マイヤーの内面の変化を探るために、より直接的に作者自身の心情が吐露されていると思われる叙情詩からマイヤーの母親像をみていきたい。

C. F. マイヤーといえば、現在ではもっぱら叙情詩人として知られることが多い。マイヤーの詩人としての試みは1860年、それまで書きためた詩をウルリヒ・マイスターという匿名詩人の名で出版しようとした『映像とバラード』(Bilder und Baladen von Ulrich Meister, 1860) が最初である。しかしこの詩集は出版社の拒絶にあい、出版は断念された。この4年後シュトゥットガルトのメッツラー書店より、匿名で出版された『あるスイス人の二十のバラード』が彼のデビュー作であり、さらに、1870年にこれ以降のマイヤーの作品の出版社となるライプツィヒのヘッセル書店から初めて自分の名で『ロマンツェと映像』(Romanzen und Bilder) を公刊する。しかし、これらの最初の試みは、いずれも読者の反響を獲得したといえるにはほど遠いものであった。『フッテン最後の日々』およびいくつかの歴史小説ですでに作家として名をなしていたマイヤーは1882年、191の詩を収めた『詩集』(Gedichte, 1892年の第五版で作品数は231に増加) をまとめ、これによってようやく詩人 C. F. マイヤーの名を確立するのである。この詩集には、それ以前の未刊も含めた三つの詩集の中から取捨選択された後、かなりの数の詩が大幅な改作を経て収録されており、『詩集』は事実上、C. F. マイヤーの決定版であり、彼の唯一の詩集であるとみなされることが多い。このような『詩集』出版の経過から、その中に収録された数多くの作品について、1860

年の最初の未刊に終わった詩集から1882/1892年の完成稿にいたるまでを比較することが可能となる。ハンス・ツェラー編集の全集は『詩集』一卷に対して四巻の解説 (Apparat) を付し、その中で、妹ベッツィによる手書きの原稿を含めた詳細な異同を付しており、これによって完成までの過程をかなり詳しくたどることができるのである¹⁰。

マイヤーの詩の中でしばしば母親との関わりで引用されるのは「蒸し暑さ」(Schwüle) という詩の中の次の文句である。アルフレート・ツェッヒはこの詩を「詩集全体の中で最も作者自身の内面を表した詩」とみなし「自分自身を救いのないものと思いきみ絶望した人間の星への叫び、天上の慰めを求める叫びである」といい、またローベルト・フェージは湖の底から「私」に呼びかけてくる「優しい声」に「水の底に死を求めた母親の記憶」を読みとり、母親は象徴的に「死へと誘惑する声」となったとしている¹¹。

Bleich das Leben! Beich der Felsenhang!	人生は色褪せ、岸壁も色褪せている。
Schilf, warum flüsterst du so frech und bang?	蘆よ、なぜそんなにあてつけがましく不安げに囁くのか。
Fern der Himmel und die Tiefe nah— Sterne, warum seid ihr noch nicht da?	天は遙か遠く、水底は近い— 星よ、なぜおまえ達は姿を見せないのか。
Eine liebe, liebe Stimme ruft Mich beständig aus der Wassergruft —	やさしい、やさしい声が 水の底の墓穴からたえず私に呼びかけてくる——
Weg, Gespenst, das oft ich winken sah!	失せろ、亡霊よ、もうお前の誘いは十分だ!
Sterne, Sterne, seid ihr nicht mehr da? (5-12)	星よ、星、おまえたちはもう姿を見せないのか。

この水の底から呼ぶ声は、フェージの指摘を待つまでもなく、湖に飛び込んで自らの命をたった作者の母親の声を読む人に想起こさせる。『コンラ

ート・フェルディナント・マイヤー 1825-1898』の編者（おそらく E. ロット=ビュティカー）はこの「蒸し暑さ」をはじめ、「こぎやめた櫂」（Eingelegte Ruder）、「夜の船で」（Im Spätboot）など一連の〈湖の詩〉全体に母親の記憶が暗示的にほめかされ、これらの詩を含む『詩集』第二部「時間」（Stunde）は、父親との思い出に捧げられている「山中で」（In den Bergen）と対をなしているとする¹²。

しかしここでは、カール・フェールのきわめて興味深い指摘に基づいて¹³、『詩集』第五部「愛」（Liebe）から「死せる愛」（Die tote Liebe）を例にとりあげ、マイヤーの内面での母親像の変貌を見ていきたい。

この「死せる愛」という詩は聖書の「エマオの使徒」（ルカ伝24章）に基づいている。キリストが処刑された三日後、二人の使徒がエマオという村に向かう途上、復活したキリストが彼らの前に姿を現した、というエピソードである。

この詩については、すでにエミール・シュタイガーもこの完成までの過程を詳しく論述し、またわが国でも二宮まや氏により詳細な研究なされているが¹⁴、カール・フェールはこの詩に母親のイメージを見てとろうとする。ツェラーの検証によれば、1860年の未刊の詩集『映像とバラード』に〈Der Gang〉のタイトルでこの詩の原型はすでに存在し、その後、タイトルだけ挙げるならば〈Der Dritte〉、〈Abendgang〉、〈Auferstandene Liebe〉、〈Alte Liebe〉、〈Die alte Liebe〉、〈Die todte Liebe〉と次々に変更され、内容の上でも大幅な改作がなされて1882年の『詩集』において最終的な〈Die tote Liebe〉という形になった。まずは、その原型ともいえる最初の形〈Der Gang〉から見ていきたい。

Der Gang

道

Im Abendlicht zwei Wanderer,
Sie schreiten über Feld,
Zu denen sich ein anderer
Mit trauten Worten hält.

夕陽の中、二人の人間が
野を歩いてゆく、
この二人に、もうひとりが
親しげに言葉をかける。

Was ist's, das ihr verhandelt
Und ganz ergriffen seid?
Was geht ihr so gewandelt
In stiller Traurigkeit?

そんなにも心とらわれ
おまえたちは何を考えているのだ。
黙ったまま悲しみにくれて
どこに行こうというのか。

Was doch in aller Munde,
Was landeskundig ist,
Dess hast du keine Kunde
Weil du ein Fremder bist?

みんなが噂しここの人間ならば
誰でも知っていることを
あなたはよそから来たので
まだ知らないのですね。

Es lehrt an unsern Flüssen
Ein mächtiger Prophet,

このあたりの川辺で
ある偉大な預言者が教を説いてい
ました、

Wir saßen ihm zu Füßen
Und lauschten früh und spät.

私たちはその人の足下に座り
朝夕となく耳を傾けました。

Da ist er Raths geworden
In die heilige Stadt zu ziehn,
Und unsre Priester morden
Und wir bestatten ihn.

そしてその人は、聖なる都
エルサレムに行き
我らの祭祀長に殺され
私たちがその人を埋葬することにな
ったのです。

Nun sind wir arg verlassen
Und Alles öd' und leer.

今私たちはわびしく取り残され
すべては虚ろで空しいものとなりま
した。

Wir können nicht faßen,

私たちはどうしていいかわかりませ
ん

So dunkel ist's und schwer

こんなにも暗く、つらいのです。

,Und hat er euch verlassen.

「その者がお前たちのもとを立ち去
ったのは

So muß es eben sein;

まさにそうあらねばならなかったの
だ。

Geht ihr auf seinen Strassen,
Da bleibt ihr nicht allein.'

彼の道を進むがいい、
そうすればお前たちも孤独ではない」

,Und ist er euch verschwunden,
So ists für eine Zeit:
Es reift in schweren Stunden
Die wahre Freudigkeit.'

「彼がお前たちのもともとから消えたとしても
それは暫しの間のことだ。
苦しい時期にこそ
真の喜びがはぐくまれるのだ」

Die Rede quoll so labend
Aus dem dunkeln Angesicht.

黒い顔をしたこの男の言葉は
湧き出る噴水のように元気を与えた。

Oh Fremdling, es ist Abend,

ああ、見知らぬお方よ、日も暮れました、
今日は私たちとともに泊まりください。

Verlass uns heute nicht.

Sie gehen in gleichem Schritte,
Sind in der Herberg' jetzt,
Der Gast in ihrer Mitte
Hat sich zurechtgesetzt.

彼らは共に歩み
今や、宿屋に到着した。
二人の間でこの客は
まっすぐ姿勢を正して座った。

Er hat das Brot gebrochen,
Mit den Augen betet er,
Sie seh'n die Hand durchstoehen,

彼はパンを割り分けて
黙祷を捧げた。
二人はその手の槍で突かれた跡に気づいた時には
すでに、主は消えていた。

Verschwunden ist der Herr.

Und Einer sagt zum Andern:
Er war's! Er aufstand!
Und hat dir nicht im Wandern,
Mir hat das Herz gebrannt?

ひとりが相手に話しかける
あの方だ！ あの方が甦ったんだ！
お前はどうか知らぬが、歩きながら
私の心は燃えたのだ。

最初の稿では、エマオ（エマウス）という地名こそでてはこないものの、最終行「私の心が燃えた」という言葉も、ほとんどそのまま聖書の言葉を引用しており（„Brannte nicht unser Herz ...“ Lukas 24, 32）、劇的な効果を高めるため多少の工夫はされているが、基本的には聖書の物語をそのまま詩の

形に書き換えただけの、その意味では単純な物語詩であり、もちろんここにはまだ母親のイメージを予感させるものはない。

1874年「ドイツ詩人の広間」(Deutsche Dichterhalle) 誌から作品の依頼を受け、これを機にマイヤーは、この詩を〈Abendgang〉というタイトルで、ほとんど別の作品と言っていいほどの大幅な改作を手がける。ここでは聖書の二人の使徒は wir「我々」、続いてすぐに ich「私」と一人称になり、さらに〈Der Gang〉では ein anderer「もう一人の男」だった復活したキリストはいきなり sie「彼女」という女性形で現れる。

Abendgang

Wir wandern wieder auf dem trauten Wegen
 Wie vormals *unserem* stillen Dorf entgegen,
Mir klopft das Herz in immer lauterem Schlägen
 Und wüßt' *ich* nicht, daß *sie* den Tod erlitten
Ich meint', es käme dort aus Feldes Mitten
 Die alte Liebe zu *mir* hergeschritten, (1-6)
 [...]
 — Weißt du wie unser Herz in Liebe lohete? —
Sie lebt! *Sie* lebt! Erstanden ist die Todte! —
 Und dort glüht Emmaus im Abendrothe. (13-15, 強調は引用者)

この sie は 6 行目の女性名詞 die alte Liebe「古き愛」を先取りして受けたものであり、上では省略したが、10行目で Herr und Meister「主であり師」といわれていることでキリストであることが明らかになり、最終行のエマウスという地名がでてきてようやく聖書の具体的な場面がイメージされるのである。しかし、少なくとも六行目まで読む限りでは、この詩の sie は女性形であるが故に読む者に、ある死んだ「女性」をイメージさせる。これが作者マイヤーがあえて意図したものであることは、さらに五年後の改訂で、表題自体を〈Auferstandene Liebe〉あるいは〈Alte Liebe〉に変えられたこと

からも想像できる。

Alte Liebe

Wir wandern wieder auf den alten Wegen
Wie vormals unserm stillen Dorf entgegen,

Mir pocht das Herz in immer lautern Schlä-
gen.

Hier lehrte die Liebe Dich geheime Worte
Und speist und tränkte mich aus ihrem Horte,

Begraben liegt sie auch an diesem Orte.

Wir haben sie gemartert und gebunden,
Mit Dornen sie gekrönt in finstern Stunden,
Bis sie verschied an blutigen, tiefen Wunden ...

Doch wüßt' ich nicht, daß sie den Tod erlitten,
So glaubt' ich, käme dort aus Feldes Mitten

Die alte Liebe wieder hergeschritten.

Und ginge zwischen uns in Abendhelle

Und spräche plaudernd: Kennt ihr diese
Stelle?

Und dort die roth bemooste Waldesschwelle?

Die alten Pfade kann sie alle nennen,

Sie hofft und wartet, daß wir sie erkennen,
Hörst Du sie reden, daß die Herzen brennen?

私たちは以前の道を再び
静かな自分の村に向かって歩いて行
く、

私の心臓はますます激しく高鳴る。

ここで愛がお前に秘密の言葉を教え
彼女の大切な財産から私に食べる物
を与えてくれた、
いまこの場所に彼女は葬られている。

暗黒の時、彼女を苦しめ、縄で縛り
茨の冠をかぶせたのは私たちだ、
彼女は深い傷を受け、血まみれにな
って死んだのだ…

だが、たとえ彼女が死んだとしても
あの野原の真ん中から、あの古い愛
が

再び歩いてこちらにやってくると私
は信じている。

そして夕日の中を我々の間にやって
きて

語りかけるのだ。お前たちはこの場
所を覚えていますか。

そして、あの赤いコケの生えた森の
入り口を、と。

彼女は古い小道の名前はすべて知っ
ていて

私たちにも覚えさせようとする。
彼女が話すのを聞いて、お前の心は
燃えないか。

<p>Sie löste sich die kalten Grabgewande, ...</p> <p>Sie lebt, sie lebt! Sie brach die Todesbande ...</p> <p>Und dort glüht Emmaus im Abendbrande!</p>	<p>彼女は冷たい死者の衣を脱ぎ捨てたのだ…</p> <p>彼女は生きている、生きているんだ！ 死の拘をうち破った…</p> <p>かなたで夕映えの中エマウスが燃えるように輝く。</p>
--	---

上の併訳ではあえて「彼女」と訳しているが、ここでは本文中の人称代名詞はことごとく表題の〈Alte Liebe〉を受ける sie となり、これがキリストであることをほのめかず言葉はあるものの非常に抽象化され、「この場所」や「森の入り口」「古い小道の名前」などの言葉は聖書の記述から完全に離れ、確定はできないまでも、むしろマイヤー自身の個人的な体験がもりこまれたのではないかと想像される。ここには、もてる愛情をすべてささげ、夫の死後決して十分とは言えない財産から¹⁵ 彼女一人で子供たちを育てながらも、息子との不和に苦しみ不幸な死を遂げざるを得なかった母親のイメージが強められ、さらにこれに対する作者自身の内面の告白、すなわち母親に対する自責の念が強く打ち出される結果となっている。もちろん sie をあえて「彼女」ととったせいでもあるが、最終行でようやくあらわれる聖書の地名エマオ（エマウス）はまるでとってつけたかのように詩全体の中で浮いた印象をさえ与える結果となっている。

結局、この詩は〈Die alte Liebe〉という題で、依頼を受けてから五年後に同誌に発表されるが、そのときにはこれらの sie はすべて ein dritter Wegeselle 「三人目の道連れ」を受けた er 「彼」に変えられ、再びより聖書の物語に近づけた穏やかな形に戻される¹⁶。

このような曲折を経て最終的に完成された詩が1882年の『詩集』に収録された〈Die tote Liebe〉である。ここでは、「エマウスへ向かうあの二人の使徒たちのように」と聖書の物語は比喩として背景に退き、もはや単に聖書のエピソードを韻文化しただけの物語詩ではなくなっている。これまでの稿

でも一人称 wir は使われていたが、これらは自己と使徒たちを同一視して詩のパースペクティブを使徒たちの視点に移しただけであり、従ってwirは表面的にはあくまでもキリストの二人の弟子を指すものであった。しかし、最終稿では、「エマオの使徒」は比喻として背景に退けられ、もはや使徒とは切り放された別の人物、すなわち兄マイヤーと妹のベッツィの姿となる。そして、この二人兄妹の前に現れる「道連れ」もここでははっきりと女性形 Weggesellin が使われ、母親の記憶が重なるのである。

Die tote Liebe

Entgegen wandeln wir
 Dem Dorf im Sonnenkuß,
 Fast wie das Jüngerpaar
 Nach Emmaus,
 Dazwischen leise
 Redend schritt
 Der Meister, dem sie folgten
 Und der den Tod erlitt.
 So wandelt zwischen uns
 Im Abendlicht
 Unsre tote Liebe,
 Die leise spricht.
 Sie weiß für das Geheimnis
 Ein heimlich Wort,
 Sie kennt der Seelen
 Allertiefsten Hort.
 Sie deutet und erläutert
 Uns jedes Ding,
 Sie sagt: So ist's gekommen,
 Daß ich am Holze hing.
 Ihr habet mich verleugnet
 Und schlimm verhöhnt,
 Ich saß im Purpur,
 Blutig, dorngekrönt,

死せる愛

穏やかな陽の光の中を私たちは
 その村に向かって歩いて行く、
 エマウスへ向かう
 あの二人の使徒たちのように、
 二人に静かに
 語りかけてきたのは
 彼らが従い、死を受けた
 師だった。
 そのようにわたしたちの間を
 夕陽の中
 静かに語りながら
 私たちの死せる愛が歩む、
 彼女は秘められたことを解き明す
 秘密の言葉を知っている。
 彼女はわたしたちの魂の
 一番奥深い宝を知っている。
 彼女はその秘密をひとつひとつ
 私たちに解きあかし説明してくれ
 る、
 彼女は言う、こうして
 私は木の十字架につるされた。
 おまえたちは私を否認し
 あしざまに嘲った、
 私は緋の衣を着せられ
 茨の冠をかぶせられ、血塗れになっ
 て座っていた、

Ich habe Tod erlitten,
Den Tod bezwang ich bald,
Und geh in eurer Mitten
Als himmlische Gestalt —
Da ward die Weggesellin
Von uns erkannt,
Da hat uns wie den Jüngern
Das Herz gebrannt.

私は死んだが
まもなく死に打ち勝ち
こうしておまえたちの間を
天上の姿となって歩いている、と。
ここで、この道連れが
誰なのか私たちにも解り
あの二人の使徒たちのように
このとき、私たちの心は燃えた。

もちろんこの詩においても、たとえ比喩になってしまったとしても聖書の「エマオの使徒」のたとえが使われているので、表面的には die tote Liebe は宗教的な「愛」(アガペー) のことであり、キリスト自身を言い替えただけのもので、従って第一義的にはこの詩の中にマイヤー自身の信仰告白を見て取るべきであろう。ドイツ語の Liebe が女性名詞である限りこれを「彼女」sie で受けるのはなんらの不都合はないのである。実際シュタイガーも、この詩の異稿を比較した詳細な研究の中でも最後までこの詩の sie に特定の女性のイメージを読みとろうとはしていない¹⁶。

しかし、カール・フェールは聖書にでてくるエマオに向かう二人の使徒の「二人」という数の偶然の一致が、しばしば二人で散歩した自分と妹の姿に、初めは無意識のうちに、同一視され、その結果キリストに死んだ母親の姿が重ったとして、「このようにあらゆる人間的なものを超越し、十字架に磔られたキリストに比較され、キリストと同一視されることで、これは死によって高められた亡き母親でしかあり得ず、そしてくまるでエマウスへ向かう二人の使徒達のように〉歩みを進める二人は、離れ難く結びついた兄妹でしかあり得ないのだ」¹⁸ と述べ、ここに母親の姿を見て取るのである。

C. F. マイヤーは作品においてさえ自分の内面感情を直接には表に出さず、神話や歴史のモチーフで包み込んで覆い隠すことを常としている。彼が仮面の詩人といわれるのはそのためである。その結果彼の作品はしばしば

多義的な解釈を許し、場合によっては読者には難解このうえないものとなる。とくに母親に対して強いコンプレクスと、彼女の死に対しては深い罪の意識を感じていたものとおもわれるので、母親の姿が彼の詩の中できわめて抽象的な形でしかほのめかされないのは仕方がないことかもしれない。そのマイヤーの母親に対する素直な気持ちが現れたほとんど唯一ともいえる詩が『宵の明星』(Hesperos)である。

Hesperos

宵の明星

Über schwarzem Tannenhange
Schimmerst mir zum Abendgange,

黒い樅の木の斜面の上
お前は夕方の散歩にでた私に向かって瞬き

Eine Liebe fühl ich neigen
Sich in deinem Niedersteigen,
Unbemerkt bist du gekommen,
Aus der blassen Luft entglommen.
So mit ungehörten Tritten,
Durch die Dämmerung hergeglitten,
Kam die Mutter, die mir legte
Auf die Schulter die bewegte
Hand, daß ich ihr nicht verhehle,
Was ich leide, was mich quäle,

お前の沈みゆく姿にある愛が
降りてくるのを感じる、
知らぬ間にお前は現れた、
色褪せた空から燃えるように。
そんなふうには足音も立てず、
黄昏の中を私の方に
母親はやってきて
私の肩にふるえる手をおくと
隠さずに話さないと言う、
私が何で悩み、何に苦しんでいるのか、

Und warum ich ohne Klage
Mich verzehre, mich zernage.
Und ich schwieg, und unter Zähren
Ließ sie meinen Trotz gewähren.

そして、なぜ訴えもせず
なぜ思い苦しみ、わが身を責めているのかと。
私は黙ったままでいると、涙を浮かべて

Hat sie Wohnung jetzt, die Milde,
Dort in deinem Lichtgefilde?

母親はついに私の頑さにあきらめた。
今あの優しい母親は
そこのお前の光の国にすんでいるのだろうか。

Deiner Strahlen saug ich jeden,
Durch das Dunkel hör ich reden,

お前の光を吸い込むたびに
闇の中から話しかけてくる声が聞こえる、

(Und mir ist, als ob die kühle
Hand ich auf der Schulter fühle)
Reden nicht von Seligkeiten,

Nur Erinnerung alter Zeiten!
Jetzt versteht sie ohne Kunde,
Wer ich bin im Herzensgrunde.

Dies und jenes muss sie schelten,

Andres läßt sie heiter gelten,
Und sie meint, wie sich's entschieden,
Gebe sie sich auch zufrieden ...

Abendstern, du eilst geschwinde!
Lass sie plaudern mit dem Kinde!

Freundlich zitternd gehst du nieder ...

Mutter, Mutter, komme wieder!

(そして冷たい手が
私の肩に感じられるように思う)
その話は、魂のやすらぎについてで
はなく

ただの昔の思い出!
今では母親は、言わなくとも
私が心の中ではどんな人間なのかは
わかっている。

あれこれと叱られることもあるかも
しれないが

他のことは笑って許してくれる、
そしてもう済んでしまったことは
しかたないことなのだと、言ってく
れる…

夕星よ、なぜそんなに急ぐのだ!
母が子供とおしゃべりするのを許し
てくれ!

楽しげに瞬きながらお前は洗んでゆ
く…

おかあさん、おかあさん、戻って来
てください!

この詩は、ツェラーの推定によれば、『詩集』が出版される1882年の直前に書かれている。少なくともこの詩だけ見る限り、ここには先にあげた湖の詩に見られるような、母親に対する感情的なわだかまりは消え失せ、少年時代の母親を懐かしむ素直な気持ちだけである。マイヤーは1875年、ほぼ五十歳という年齢になってようやく結婚し、その四年後には娘のカミラも生まれている。当時の思い出として妹ベッツィは「もしお母さんが生きていたら、ようやく手に入れた私の今の幸せをどんなに喜んでくれたことだろう。私にかけた望みがついに満たされたのだ!」という兄の言葉を記している¹⁹。

歴史小説『女裁判官』が発表されるのはこの詩集の三年後である。この小説は、歴史に題材を求めながらも、兄妹の近親相姦に近い愛情を描き、さらに母親の過去の過ちを暴きたてるといった問題作であり、たとえ母親に対し

てわだかまりがなかったとしても書くのをはばかられるような内容を持って、作者の過去を知る者は、どうしても彼と妹ベッツィ、さらに母親との関係をこの物語に重ねてしまう。この作品の中でマイヤーがこのような微妙なモチーフと正面切って取り組むことができるようになったのは、ここに至るまでの長い年月の時間的隔たりと、それによる記憶の浄化が彼の内面で必要だったのであらうと思われる。

注

- 1 <Autobiographische Aufzeichnung 1885>, C. F. Meyer Sämtliche Werke. Historisch-kiritische Ausgabe in 15 Bänden, besorgt v. Hans Zeller und Alfred Zäch, Bern 1958-1996 (以下 HKA と略記) Bd. 15, S. 131. なおこの他にもマイヤーは幾度か、自らの作家としての略歴を記した短い自伝的な文章を公にしているが、母親について比較的詳しくふれているのはほとんどこの箇所だけである。
- 2 C. F. マイヤーの母親エリーザベト・マイヤー＝ウルリヒの伝記はマリアンネ・ブルクハルトによって書かれていて、おそらくこれが現在まで彼女の唯一の伝記と思われる。Marianne Burkhard: Abwehr eines Traums: Betsy Meyer-Ulrich. Zürich 1990. (Wieder abgedruckt in: Pusch, Luise F.: <Mütter berühmter Männer> insel taschenbuch 1356, Frankfurt a.M. u. Leipzig 1994 S. 245-287)
- 3 なお、C. F. マイヤーも本文中で引用した略伝の中で述べているが、彼女が生まれた年1802年にはナポレオンの調停案でフランス軍がスイス国内から撤退し、チューリヒでは連邦派(守旧派)政権に返り咲き、これを阻止しようとするアンデアマツト將軍率いるベルンの共和国軍によって「チューリヒ砲撃」が引き起こされる。この時共和国軍の包囲に対して市民防衛軍を率いチューリヒの町を守り抜いた「祖国の父」ヨーハン・ヤーコブ・マイヤーはC. F. マイヤーの父方の祖父であり、一方、母方の祖父ヨーハン・コンラート・ウルリヒは共和国軍を引き入れたとして祖国の裏切り者とされた。
- 4 Johann Caspar Bluntschli <Denkwürdiges aus meinem Leben> 1884. (Hans Wysling/Elisabeth Lott-Büttiker (Hrsg): Conrad Ferdinand Meyer 1825-1898, Gedenkband zum 100 Todesjahr. Zürich 1998, S. 18-19より引用)
- 5 Betsy Meyer-Ulrich: „... das ganze Herz deiner Mutter“ Briefe an Betsy und Conrad Ferdinand Meyer 1846-56, hrsg. v. Dagmar Schifferli und Brigitta Klaas Meillier. Zürich 1998.
- 6 妹ベッツィ・マイヤーも回想録の中で、若きコンラートがロマン派の作家ジャン・パウルに心酔し、繰り返し彼の本を読んでいたことに触れた箇所です。述べている。「私たちの母親も、この本を読むことには全く口を挟みませんでした。彼女自身がその魅力をよく知っていたのです。(中略) 私がここでこの二人

(ジャン・パウルとシャトーブリアン)を一緒にしたのは、ただ、私たちの母親が若い頃にこの二人の作家を、息子と同じように深い愛情と理解をもって熱狂的に読んでいたからなのです」(Betsy Meyer: Conrad Ferdinand Meyer in der Erinnerung seiner Schwester Betsy Meyer. Nach der Buchausgabe von 1903. Basel 1971, S. 56)。彼女の頑なな反対の理由についてしばしば伝記などで引き合いに出されるエピソードは、母親がシュトゥットガルトの詩人グスタフ・プフィッツァーに息子の詩を送り、詩人として見込みがあるか助言を求めた、しかしプフィッツァーからの返事は、きっぱり詩作はあきらめるべきだというものであった。(Adlf Frey: Conrad Ferdinand Meyer. Sein Leben und seine Werke. Stuttgart 1900, S. 44) これ以後、彼女は息子の詩作の才能を疑ったのだといわれる。しかし、ブルクハルトは彼女の伝記の中で、むしろ息子の才能に彼女の敬虔主義的信仰と相いれない危険なもの、つまり、創造という点で自らを神と同じ地位におこうとする芸術的天才の「傲慢さ」を見て取り、息子の詩作を厳しく戒めたのであるとする。(M. Burkhard, S. 276f.)

- 7 Betsy, S. 87. なおここでベッツィは、母親が思わず知人に向かって口ばした「私の才能をもった上の子供にかけた母親の将来の期待は失われました。息子は自分で自分自身を葬っているのです。私にとってあの子はもういないのです」(S. 86)という言葉に激しい衝撃を受け、このことが彼が精神病院入りに自ら同意するきっかけになったと述べている。
- 8 Betsy Meyer-Ulrich, S. 243f. 以下、彼女の書簡集からの引用は、S. 337, S. 341, S. 344, S. 347. なお彼女はアントニン・マレの病死に対する自責の念に関して同じ手紙の中で「・・・あの優しいおじさんの(マレのこと)病気に私は、ずっと気づかずにいましたから、この病気に対しては私にも罪があります—それに十分な看護もしてあげられませんでした—私には激しい痛みを感じている、この優しいおじさんの一哀いような人です—病気が重荷に感じられてしまい、そのため、彼の死を願ったばかりではなく、一刻も早く逝ってくれるように望むことさえしたのです。そのことを考えると私の心は打ちひしがれます」(8月18日)と告白している。S. 354
- 9 ibid. S. 365f.
- 10 以下のテキストは主として HKA, Bd. 4. Gedichte Apparat zu den Abteilungen V, VI, und VII, besorgt von Hans Zeller. Bern 1975, S. 110-121により、句読法や表記の不統一なども手書き原稿のまま残している。
- 11 Alfred Zäch: Conrad Ferdinand Meyer. Dichtkunst als Befreiung aus Lebenshemmnissen. Frauenfeld 1973, S. 242. Robert Faesi: Conrad Ferdinand Meyer. 2. Ausgabe, Frauenfeld 1948, S. 59. フライは C. F. マイヤーの伝記の中で次のように述べる。「たいてい彼は近くの岸辺で小舟に乗って湖の真ん中に漕ぎだすと、水に飛び込んで、小舟が見えなくなるまで泳ぎ続けた。彼がこの舟遊びから帰ってくるのは次第に夜遅くなってきた。母親と妹は、しばしば彼が自分の人生が厭わしいとほのめかすようなことを口にしていただけに、なおさら心配したのである」(A. Frey, S. 53) なお、C. F. マイヤーの青年期と晩年における精神的不安定

と自殺願望についてはしばしば家系的な要因が取りざたされるが、その根拠として、父方の祖父母がいとこ同士であったこと、母方の祖父も晩年は深刻な鬱症状に悩んでいたこと、母親エリーザベトが自殺以前にも兄の死後やコンラートの誕生直後などしばしば周囲が彼女の生を危ぶむほどの憂鬱病に苦しんでいたこと、またマイヤーの一人娘カミラも1936年、祖母と同じようにチューリッヒ湖に身を投げ自ら命を断ったことなどがあげられる。

- 12 H. Wysling/E. Lott-Büttiker, S. 83
- 13 Karl Fehr: Conrad Ferdinand Meyer. Auf- und Niedergang seiner dichterischen Produktivität im Spannungsfeld von Erbanlagen und Umwelt. Bern 1983. S. 91ff.
- 14 Emil Steiger: C. F. Meyer <Die tote Liebe> In: Meisterwerke deutscher Sprache aus dem neunzehnten Jahrhundert, 3. Auflage, Zürich 1961, S. 202-222.
二宮まや: C. F. Meyer の詩 Die tote Liebe (関西大学独逸文学「独逸文学」22号1978年, 1~23頁。なおシュタイガーはこの詩の変遷を <Abendgang> から始めている。
- 15 彼女は非常に倹約家であり、子供たちに宛てた手紙のなかでも、ほとんど毎回かならずと言っていいほど「節約」のことが出てくる。「またお金の話になります、残念なことにこの手紙でもそうですし、私たちの生活にとってこのことはとても重要なことなのです。(中略) もしも天国に行けば、私たちももはやお金の話をする必要もなくなるのですけど。でも、ジャン・バウルも言っていますが、人間はお金を使わないではあの世に行くこともできないのです」(1853年7月1日、コンラート宛)。マイヤーが生計の心配をせずに文筆活動に専念することができるようになるのは、アントニン・マレの死後、ローザンヌの裕福なマレの家から莫大な遺産が譲られた以後である。

16 Die alte Liebe

Wir wandern wieder auf den alten Wegen
Dem Dorf in letzter Abendglut entgegen,
Wir lassen trauernd einen Raum inmitten
Für unsre Liebe, die den Tod erlitten,
Doch ob wir die verzagten Blicke senken,
Wir müssen an die alte Liebe denken ...
Und, siehe, plötzlich in der Abendhelle
Begleitet uns ein dritter Weggeselle,
Er weiß die trauten Pfade rings zu nennen,
Er redet freundlich, daß die Herzen brennen:
„Hier lehrt' ich euch des Herzens schlichte Worte,
Hier speist' und tränkt' ich euch aus meinem Horte ...
Ihr aber habt mich auf das Kreuz gebunden,
Daß ich verschied an blut'gen tiefen Wunden.
Ihr sucht mich in meinen Grabwänden!
Und kennt mich nicht? ...

Ich bin vom Tod erstanden!“ —

- 17 二宮氏は、シュタイガーの研究をふまえながらも「夭折した恋人」のイメージをこの言葉に重ねている。二宮，上掲書14頁。
- 18 Karl Fehr, S. 92, S. 95.
- 19 Betsy Meyer, S. 157.

(たむら・ひさお 政治経済学部専任講師)